

韓国京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修の実践報告

— 2006 年度海外専門課程研修のプロジェクトワーク活動 —

許 明子

要 旨

筑波大学留学生センターでは 2005 年度より韓国京畿道の中等教育機関の現職日本語教師を対象に教師研修を実施している。本稿は 2006 年度海外専門課程研修の中で、プロジェクトワーク実施に焦点を当てて報告を行う。プロジェクトワークは韓国の日本語教育の現場に直接役立てるために実施した体験型活動で、1 週間の学校見学、日本事情の調査分析、日本の話芸の体験の 3 つの活動を行った。

【キーワード】 プロジェクトワーク、学校見学、日本事情調査

Report about the In-service Program for Korean Teachers of Japanese Training Program of the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education : project works at the International Student Center of Tsukuba University, 2006

HEO Myeongja

【Abstract】 The International Student Center of University of Tsukuba is currently carrying out a training program for Japanese language teachers in Korean middle grade schools of Gyeonggi-do from 2005. This report focuses on the project works in the training program. The Project works is composed of three activities which school tour of 1 week, survey and analysis of Japanese culture, experience of rakugo.

【Keywords】 project works, school tour, survey analysis of Japanese culture

1. はじめに

筑波大学留学生センターでは2005年度より、韓国京畿道の中等教育機関において日本語を教えている現職日本語教師を対象に、韓国国内（深化課程）と日本国内（海外専門課程）においてそれぞれ1回ずつ教師研修を実施している（許 2005）。海外専門課程の研修は、韓国国内の研修を受けた研修生から12名を選抜し、毎年1月に本センターにて4週間研修を実施している。海外研修の目的は、日本語力の向上はもちろん日本の中教育や日本文化の理解を深め、韓国の日本語教育現場に役立てることであり、その目的を達成するために様々な体験型、実践型の研修を実施している。2005年度の海外専門課程研修の実施については許（2006）、衣川・酒井（2006）、許（2007）に詳しく報告されている。

本稿では2006年度の海外専門課程の研修として実施された研修の中で、特にプロジェクトワークの実施に焦点を当て、目的、活動内容、実施結果、成果について報告を行う。

2. 2006年度海外専門研修の概要

2006年度の海外専門課程の研修（以下、日本研修）は、研修生12名を対象に2007年1月9日より2月6日までの1ヶ月間、留学生センターにて実施された。1ヶ月間の研修内容と授業時間およびコマ数は以下の通りである。

- 技能別日本語（20コマ×75分）：文法論Ⅰ、文法論Ⅱ、コミュニケーション論Ⅰ、コミュニケーション論Ⅱ、語彙論、作文論、音声教育論
- 特別講義（4科目）：漢字教育、日本語の美しさ、国際関係の中の日本語と韓国、日本語の授受表現
- 留学生センター授業見学（10コマ×75分）：日本語予備教育コース（初級レベル）、日本語補講コース（中上級レベル）の授業見学および聴講
- 茨城県内中学校、高等学校の派遣見学および韓国文化紹介：2007年1月22日～26日（茨城県立並木高等学校、茨城県立牛久栄進高等学校、茗溪学園高等学校、つくば市立高崎中学校、小美玉市立小川南中学校、小美玉市立小川北中学校の6校で実施）
- プロジェクトワーク（1）：学校見学およびホームステイの準備、派遣校の関係者およびホストファミリーとの打ち合わせ
- プロジェクトワーク（2）：日本事情の調査分析および発表会
- プロジェクトワーク（3）：日本の話芸（落語）体験

本研修は2005年度に引き続き2年目の研修であり、1年目の研修の成果を踏まえ、韓国の日本語教育現場に直接役に立てられる内容に改善を行った。2006年度の日本研修の最も大きな特徴は、2005年度のゲストセッションに代わるものとして、プロジェクトワーク（1）（2）を実施したことである。

3. プロジェクトワーク

韓国教育部の第7次教育課程の第2外国語としての日本語教科目のガイドラインの告示文に「日本文化への関心と理解しようとする姿勢を育てること」「日本との交流に積極的な態度を養うこと」という学習目標が明記され、学習素材として日本文化の理解、日本人の言語行動の理解、日本人の日常生活の紹介が挙げられている。研修生はこのガイドラインに従って学習目標を立て、素材を選んで日本語を教えているわけであるが、中には来日経験がない、もしくは十数年前に観光で来日した経験のみという教師も多く、学校現場で困難を感じている教師が少なくない（許 2006）。

研修生の教育活動を支援するために、日本研修では次の2つの目標にそってカリキュラムを立てた。一つは、研修生の日本語力の向上を図り、日本語に自信が持てるようにする。そのために、できるだけ多く日本人と直接コミュニケーションをとる機会を作る。もう一つは、学校現場で日本語を教えるときに直接役に立つ活動を中心に研修を行う。そのために、日本の学校現場を体験してもらうとともに、日本事情について調査を行い、研修生自身が必要な情報を収集し分析することを体験する。

前者の目標を達成するために、2005年度に引き続き、技能別日本語授業を行い、日本語力の向上を図るとともに各技能別に日本語を教えるときの指導法について学べるようにした。また、留学生センターの授業を見学もしくは聴講することによって初級レベルあるいは中上級レベルの日本語の教え方について考える機会を作るとともに、落語を体験することによって日本語の面白さを再発見できる機会を作った。後者の目標を達成するためには、2005年度に引き続き、茨城県内の中学校・高校に1週間見学を行い、韓国文化を紹介する機会を作った¹。学校見学と同時期に日本人家庭に2泊3日のホームステイを実施し、日本人の日常生活を体験するようにした。これらの活動は2005年度より実施しているものであり、2006年度も継続して行った研修内容である。

2006年度の日本研修プログラムの最大の特徴は、学校見学およびホームステイを行うために、研修生自身が直接学校関係者およびホストファミリーと連絡を取り合い、打ち合わせを行ったことである。1週間の学校見学を行うにあたって研修生自身が校長、教頭、見学担当教員宛てに依頼状を送付したり、自己紹介文を送ったりして、必要な情報の収集、研修生自身の情報を与えるなどの活動を行った。また、研修生は現職日本語教師であるため、韓国人学生を教える際に役に立つ日本文化について実際に調査し、分析を行う経験ができるようにした。韓国の日本語教育現場では日本人の日常生活の理解や、日本文化の理解が求められているため、研修生自身が必要と思われる日本事情について情報を得、分析するといったプロセスを体験してもらうことが狙いであった。

本研修プログラムで実施したプロジェクトワークの活動内容および実施時間数をまとめると、以下の表1の通りである。

表1 プロジェクトワークの活動内容

内容	活動	実施時間数
プロジェクト(1) ・学校派遣実習 準備および実施 ・ホームステイ 準備	日本の学校教育について調べ、学校派遣実習の準備を行う。派遣される学校に依頼文、自己紹介文を送ったり、ホームステイ先にあいさつ状、お礼状を送ったりして、直接連絡を取り合う。	・75分×5コマの準備 ・5日間の学校派遣実習実施 ・2泊3日のホームステイ実施
プロジェクト(2) 日本事情調査	研修生自身が調べたいと思う日本事情、文化について、テーマを決め、調査計画を立てて調査を実施、分析、報告を行う。	75分×15コマ
プロジェクト(3) 日本の伝統話芸 の体験	日本の話芸（落語）について学び、落語会で実演する。	75分×5コマ

これらのプロジェクトワークの活動を通して、研修生自身が日本の学校関係者と直接連絡を取り合い、積極的に研修に参加できるようになった。また、研修生自身が知りたい日本事情、日本文化についてテーマを決め、調査を行い、分析を行うことを経験することによって、その過程から能動的に日本文化を学んで、その結果を教育現場に応用する方法を考えるよう働きかけた。

3.1 プロジェクト(1) 学校見学およびホームステイの事前準備

3.1.1 目的および概要

本研修における学校見学の活動は、研修生が茨城県内の6校の中学校、高校に1週間見学者として訪問し、生徒と同じ活動を行うことによって日本の学校生活を体験してもらうものである。日本の公立、私立の中学校、高校の学校教育制度を理解するとともに、教育現場での体験を通して日本人学生の日常生活を理解し、韓国の日本語教育の現場に役立てることが狙いである。研修生が各学校でどのような授業を見学し、どのような活動を行うかは各学校の事情により異なるが、次の3つは共通して実施した。

学校派遣実習の主な活動は以下の通りである。

- ① 授業参観：授業を参観したり、生徒といっしょに学校給食を摂ったり、朝礼や帰りの会、掃除などにも参加し、生徒の学校生活の全般を理解する。授業参観は国語のみならず音楽、体育、英語、部活動など様々な教科目を見学、参観する。
- ② 韓国文化紹介²：1週間の派遣期間中に最低1時間以上、韓国の文化を紹介し、生徒と交流を行う。生徒および教職員に韓国の文化を紹介することによってお互いが両国の文化を理解する機会を作る。
- ③ ホームステイ：学校見学期間中に学校の教職員もしくは生徒の家庭に2泊3日のホー

ムステイを行い、日本人の一般家庭の生活を体験する。日本人の衣食住の習慣を実際に体験することによって日本人の生活様式について理解を深める。

3.1.2 事前準備および進め方

研修生が見学を行う各学校について、事前に情報を収集し、学校見学の効果を最大限に拡大させることを目的に行ったのがプロジェクト（1）である。学校見学は2007年1月22日～1月26日の5日間実施されたが、来日直後から見学を行う各学校の校長、教頭、見学担当者と連絡を取り合い、見学及び実習に必要な準備を行った。研修生の見学期間中のスケジュール、授業参観の回数および教科目名、生徒の人数、韓国文化紹介授業の回数、場所、使用機材の状況、教職員および生徒の希望などについて情報を収集するようにした。同時に、ホーステイ先のホストファミリーに挨拶状、自己紹介の手紙を送り、連絡を取り合うようにし、ホストファミリーと事前に交流を行うようにした。

プロジェクト（1）は以下のスケジュールで授業を行い、学校見学およびホームステイの準備を進めたが、各学校との連絡状況や進め方については研修コーディネータが報告を受け、必要に応じてアドバイスをを行った。

〈1回目〉 プロジェクトの実施の概略について説明

- ① 各学校の1週間のスケジュールについて説明し、見学担当者の連絡先を伝える。プロジェクトの目的、進め方を説明する。
- ② 見学を行う学校との連絡方法について説明。
- ③ ホームステイ先について説明。

〈2回目〉 見学依頼状、自己紹介の手紙を書く

- ① 見学を行う学校に見学依頼状を書き、ホームステイ先宛てに自己紹介の手紙を書く。
- ② 見学期間中に希望する見学内容、韓国文化紹介の方法（回数、対象）など、見学期間中の予定や希望について具体的に書く。
- ③ 研修生の連絡可能な方法を各学校やホームステイ先に伝える。

〈3回目〉 直接連絡を取る

- ① 依頼状や自己紹介の手紙を投函する。
- ② 必要に応じて各学校の担当者、ホストファミリーとEメール、電話、FAXなどを利用して直接連絡を取る。
- ③ 韓国文化紹介の授業のリハーサル（1回目）を行う。

〈4回目〉 学校見学およびホームステイ実施前の最終確認

- ① 見学を行う学校との連絡内容を確認し、返事を書く。
- ② 学校見学およびホームステイ前の連絡状況の最終確認を行う。
- ③ 韓国文化紹介のリハーサル（2回目）を行う。

〈5回目〉 学校見学、ホームステイ終了後

- ① 見学を行った学校、ホームステイ先へお礼状を送る。
- ② 各学校の見学状況およびホームステイについて報告を行う。
- ③ 各学校から韓国文化紹介の実習について反省会を行う。

研修生は日本の学校を見学した経験がなく、日本語で韓国の文化を紹介することも初めての経験であるため、学校見学を行う前は非常に緊張していたが、学校関係者とホストファミリーと連絡を取り合う過程で日本語によるコミュニケーションが取れるようになり、自信が持てるようになったようである。また、研修生自身が見学を行う学校やホームステイを行うホストファミリーと直接連絡を取り合うことによって不安が和らいだようである。

3.1.3 実施結果

学校見学に当たって、研修生が学校関係者と直接連絡を取りあい、打ち合わせを行ったことによって日本語の運用力の向上が見られた。日本語で自己紹介の手紙、依頼状、お礼状を書いたのも初めての経験であり、さらに韓国文化を紹介するために情報を収集し、事前準備を行ったことによって自信を持って学校見学に臨むことができたようである。

このプロジェクトの実施について研修修了後に行った研修生の自己評価表³には、次のような記述が見られた。

- 難しい手紙を実際に書いてみることで大変な勉強になりました。学校見学を通してこの研修の本当の意味が分かるようになりました。
- 学校訪問とホームステイの後、お礼の手紙を書きながらもう一度感謝の心を持つ。御礼の手紙の書き方がはっきり分かるようになって、今後日本人と交流するとき、自信を持つようになった。手紙を書く恐れがなくなったのが一番の成果である。
- 日本の手紙の書き方を知っていることだけでなく、実際にやってみることでいろいろなことを学んだ。今まで受けたどの研修、教育より日本語教育に役に立った活動だった。1回目の手紙に比べて2回目の手紙のほうが内容がずっと多くなりましたし、文章の表現を何度も見ていただいて正しくていい文章で私の心を伝えられるようになってよかったです。
- 学校訪問の前後に手紙の言葉や書式に従った書き方と、ホームステイを受け入れてくれた家庭への御礼の手紙の書き方が異なるのが難しかったんですが、相手に気持ちを伝える方法が分かったのが役に立ちました。
- 準備する段階で相手に電話で話す方法、表現などが学べてよかったです。
- 学校見学の準備過程で前もって校長、教頭先生、担当先生に挨拶の手紙と電話連絡を通して事前に準備ができてよかったです。自主的に準備をしながら人間関係を作るの

に必要な実際に有効な日本語の使用ができたし、ネットワークが作れてよかった。

研修生は日本の学校生活の体験を通して生徒の学校生活の理解が深まったことはもちろん日本人教師の教育に取り組む姿勢から強い刺激を受け、研修生自身の教育活動を見直すきっかけになったようである。授業参観、韓国文化紹介の授業に関する研修生の自己評価の一部を紹介する。

- 高校を見学して私ももっとプロフェッショナルな教師にならなきゃと思いました。学校の長所（17歳の卒論、部活動など）を見て、私が韓国で実践できるのは何かと考えました。
- はじめは緊張して授業をしましたが、だんだんよくなった。生徒達に韓国語が日本語と語順が同じだということを説明するときに反応がよかった。韓国の伝統的な遊びユンノリをしながら生徒達と話したりして本当に楽しい授業になったと思う。
- 韓国で2ヶ月間にわたって準備をした資料があって自信を持って授業ができた。その上、訪問校の積極的な協力と生徒達の友好的な態度のおかげで全てのことが順調だった。
- 派遣実習前は自分ができるかどうか不安があり、自信もなかったんだけど、学校側の歓迎ムードと配慮、学生達の深い関心が不安を解消してくれた。気軽に学生達に接近できたし、教員との交流を深めようという気持ちが強い。
- 実際の授業が面白くてすばらしい経験だった。日本語で授業をしたことがなかったので緊張したが、自信が持てるようになった。学校関係者が大変友好的で親切だった。日本人を深く知る機会になってもっと理解できたと思う。
- 日本語の教師として日本の学校を見学したり、高校生と話し合えるいい経験ができて本当に勉強になりました。私が教えている生徒と同じく中学生に会うようになって嬉しかった。韓国の文化を伝えるのが私達の目標だったが、私の教育現場に行っているいろんなものを見て、習える機会を楽しんでいた。生徒達と韓国と日本について話すことができよかった。先生方も興味を持って韓国についていろんなものを聞いた。教育現場を直接経験できてよかった。

学校派遣実習を通して研修生が日本の学校教育現場を体験しただけではなく、派遣校の教職員と親密な交友関係を結んだ研修生もいた。研修生は日本人教師とのネットワークの構築を強く望んでいたが、現職教師同士の情報交換は両国の学校教育を理解していく上で重要な役割を果たすものと思う。今回の学校派遣実習が単発的なもので終わるのではなく、今後の民間交流にもつながるようになり、草の根の国際交流も期待できる。

また、ホームステイを通して日本人の生活様式を学んだり、両国の生活習慣の違いにつ

いて話し合ったりしたという。ホストファミリーに韓国語を教えたり、韓国料理を作って食べたりした家庭もあり、活発な交流が行われたようである。研修生の感想の一部を紹介する。

- ホストファミリーとの交流で、和室、豆まきなどの日本伝統を経験したのがよかったです。そして、日本の家庭でどういうふうに住んでいるかを分かるようになって役に立ちました。
- 日本の家庭で韓国の文化を伝えたり、日本の家庭の文化を習ったりしたのがとてもよかったです。

本プロジェクトの実施を受け入れた学校側からは国際交流の一環として生徒との交流はもちろん教職員とも積極的に交流を行い、非常に良い成果があったという評価が得られた。大学の日本語教育と地域の国際交流を結びつける点において意義のあるプロジェクトだったと思う。学校見学終了後に研修生の見学態度、韓国文化紹介の時間、今後の交流の在り方などについて見学担当教員を対象にアンケート調査を行ったが、その結果の一部を紹介する。

- 授業参観は合計7時間で積極的に取り組んでいらっしゃいました。特に、2年7組の英語に授業には講師の立場で参加し、生徒からも好評でした。先生方(研修生)に「アンヨンハセヨ」など、知っている韓国語であいさつをしている生徒の姿をたくさん見かけました。交流が順調であったことは間違いありません。生徒たちの様子を見ると、韓国文化に関心を持って静かに説明を聞いていました。中には先生方の説明が待ち切れず、先を催促する生徒もいました。
- 2年生を中心にクラス副担任として朝の会、給食、清掃、帰りの会にもクラスにいて、生徒と積極的に交流を行いました。全クラス、全教職員の授業を参観し、2年生の教師ばかりでなく、授業や職員室でコミュニケーションをとっていました。私たちが学ぶことが多かったです。韓国の教育事情や近代化の波、経済などがよくわかりました。日本と共通する点、相違点など、大変新鮮でした。日本と韓国が「近くて遠い国」から「近くて近い国」になるように、この交流が続くことを願います。
- 休みの時間や昼食時に多くの先生方と交流を行いました。一緒に食事を摂ったり、文化や教育について語り合うことができました。ただ、受験シーズンで忙しいために交流をしたくてもできない先生が多くいました。生徒たちは韓国語とハングル文字にとっても関心を持ちました。ぜひ、日本の生徒たちに「韓国文化」としてそれらを教えていただければ交流の礎になると思います。
- 韓国については映画やテレビを通して断片的な知識であったものが直接的な文化紹介により大いに理解することができた。先生方はとても積極的でさまざまな場面で

生徒とも教員とも交流を深めていました。

- 各授業に関心を持って積極的に取り組んでいました。韓国文化紹介の前に社会科担当の先生と事前の打ち合わせがあったためうまく行われました。文化の面においては大変よかったと思いますが、社会的な面にも触れてほしかったです。

3.2 プロジェクト (2) 日本事情の調査・報告

3.2.1 概要および目的

プロジェクト (2) は韓国の学校現場に活用できる日本事情について、実際に調査を行い、必要な情報を得る活動である。研修生が一方向的に授業を受ける受け身の研修ではなく、能動的な研修を行うための活動であり、目的は次の2点である。一つ目は、教室外の実践活動を通して、研修生同士が韓国語で話す時間を極力減らし、日本語によるコミュニケーションの時間を増やす。二つ目は、研修生自身が具体的に計画を立てて実際に調査を行うことによって、自分が知りたい日本事情について自主的に調べ、分析する力を身につける。調査計画書の作成、実施、分析、報告の一連の流れを研修生自身がコーディネートし、調査の企画、実施、データ処理、問題解決、修正にいたるまで諸活動を研修生自身が能動的に行う。調査の分析結果について報告書を作成し、研修生同士が情報交換できるように成果物としてまとめる。

3.2.2 実施方法

1) 方法：

- 研修生が1人もしくは2～3人のグループで、調査の計画を立てる。グループで調査を行う場合は研修生同士が十分に意見交換を行い、役割を分担し、全員がプロジェクトに参加する。調査計画書を作成し、調査の目的、方法、被験者の人数、結果処理、報告書作成の流れにそって、計画を立てる。
- アンケート用紙の作成もしくはインタビューの質問項目を決めて、予備調査と本調査を行う。
- 調査結果を分析し、調査の目的に照らし合わせ、調査の意義、明確になったこと、問題点などについて分析を行う。結果予測と本調査の結果の違いについて検証し、結果の意義について考え、学校教育における応用について考える。
- 結果報告書を作成する。

2) スケジュールおよび授業内容

〈1回目〉

- ① 調査内容、調査方法、調査目的、被験者の特定など、調査の概要について話し合う。

② 個人で調査するのか、ペアもしくはグループで調査するのかを決め、役割分担を決める。

③ 調査スケジュールを立てる。

〈2回目〉

① 調査方法を明確にし、調査の手順を確認する。

② アンケートを行う人はアンケート用紙を作成する。

③ インタビューを行う人は、質問する方法、答えを導き出す方法など、日本語のインタビュー表現を中心に練習を行う。

④ 調査の結果について予測する。調査結果の予測についてメモを取っておく。

〈3回目〉

① アンケートもしくはインタビューの練習を行い、問題点があれば改善する。

② 予備調査を実施し、本調査を行う前の最終調整を行う。

〈4回目〉

① 本調査(1)を実施する。

② 問題が発生した場合、授業担当者と相談し、解決策を模索する

〈5回目〉

① 本調査(2)を実施する。

② 集まったデータを分析する。

③ 被験者が足りない場合は、本調査を継続する。

〈6回目〉

① 調査の結果を分析する。

② 調査結果の予測と実際の分析結果を比較する。

③ 調査結果が当初の目的、方法、スケジュール通り実施できたかどうか検証する。

〈7回目〉

① 調査の分析結果について報告書を作成する。

② 調査の概要、結果、意義などについて分かりやすくまとめる。

3.2.3 実施結果

12名の研修生が3名ずつ4つのグループを作り、アンケート調査、インタビューを行った。グループワークを通して研修生同士の話し合いが持たれ、役割を分担し、プロジェクトを進めていた。研修生は調査のテーマとして、筑波大学および派遣される学校で実施が可能なもの、韓国の教育現場に応用したいもの、日本人の韓国に対する理解に関するものを選んでおり、プロジェクトワークの狙いを十分に理解し、活動を行ったことがわかる。4グループの調査のテーマ、目的、概要についてまとめると以下のとおりである。(各グルー

プの調査結果のまとめは研修生の報告書より引用)

1) 筑波大学留学生の実態調査

- 目的：韓国で日本留学を計画している学生達を指導する際に役立てる。
- 調査対象：留学生センターで勉強している中級レベル以上の留学生およびキャンパス内の留学生 28 名
- 調査方法：アンケート用紙による調査。
- 調査内容：留学生の国籍、年齢、留学生の目的、留学の満足度、生活費など計 17 項目
- まとめ：筑波大学への留学の目的や留學生活の満足度、生活費などについて知ることができた。これはどんな本でも見つからない情報である。注目すべきは、「日本人以外の国の友達がいますか」という項目について「いない」と答えた人は一人もいなかった。これを見て、留学生はいろいろな国の人と交流をしながら勉強していることがわかった。以上の情報が留学生を夢見る生徒たちに少しでも役に立てばと思う。

2) 韓国の日本語教科書に紹介されている日本の伝統文化についてどの程度理解されているか

- 目的：韓国の日本語教科書に紹介されている日本文化が日本国内ではどの程度理解されている内容なのかを検証し、授業に役立てる。
- 調査対象：つくば市、小美玉市の中学校 1 年生 58 名、高校 2 年生 31 名、筑波大学の日本人大学生 17 名、外国人留学生 19 名
- 調査方法：アンケート用紙による調査
- 調査内容：歌舞伎、能、相撲、茶道、お正月などの日本の伝統文化、外国人に紹介したい日本の伝統文化についてなど計 10 項目
- まとめ：韓国の日本語の教科書に紹介されている日本の伝統文化についてすべて知っているのと答えたのは中学生 90%、高校性 96%、大学生 100%、留学生 92%であった。その一方、経験したことがあるのは、中学生 8.5%、高校性 19%、大学生 21%、外国人留学生 19%で、知っているのと体験しているのとはかなり差があることがわかった。韓国の日本語教科書に紹介されている日本の伝統文化は日本では普遍性があることがわかった。今後はこれらの日本文化について自信を持って教えるつもりである。

3) 韓流ブームにより日本の中学生、高校生、大学生の韓国についてのイメージがどう変わったか

- 目的：韓流ブームで日本の中学生、高校生、大学生の韓国についてのイメージがどう変わったかを調査し、韓流ブームが進むべき肯定的な方向を考える。これからど

のように韓国・日本が交流を深めていくかの方向性を考えるきっかけにしたい。

- 調査対象：筑波大学の日本人学生、つくば市内の中学生、高校生、合計3名
- 調査方法：アンケート調査および一部はインタビュー調査
- 調査内容：韓国の芸能人と歌手、ドラマと映画、イメージの変化の三つの計6項目
- まとめ：韓国人の芸能人が好きになった人は多かったが、韓国へのイメージは変わらないという人が多かった。韓国へのイメージが変わるには周りに韓国人の友達や知りあいがあるかどうかのほうが大きく影響するようである。つまり、何よりも、一人ひとりが直接触れ合う現場で具体的に民間外交官の役割を話すのが大切なことだと思う。

4) 日本人が知っている韓国

- 目的：筑波大学の教職員、大学生、大学院生、一般人を対象に、韓流ブームで韓国がどのくらい日本に知られているかを把握し、日本と韓国の相互理解、交流について考える。
- 調査対象：筑波大学内の日本人学生（15名）、教職員（8名）、大学院生（10名）〈一般人（9名）合計42名
- 調査方法：アンケート用紙による調査
- 調査内容：韓国について（1）経験（2）知識（3）情報の3つの分野の合計15項目
- まとめ：韓国に行ったことがあるなどの経験、韓国語のあいさつの意味がわかるなどの知識、韓国に関する情報収集などのすべての調査項目において韓国に関心が高いということがわかった。筑波大学は海外からの留学生が多いので平均以上の結果が現れたと思う。さまざまな問題で時々意見が衝突してしまう両国であるが、マスコミによって偏見を植え付けられている部分があるのではないだろうか。この点については、今後、さらに個々の項目について詳しい内容の検討と調査範囲を広げる必要がある。このアンケート調査を行い、以前よりもっと気軽に日本人と話せるようになった。

本プロジェクトで日本人の韓国に対する意識調査が2件あった。これは、韓国人が日本語を学び、日本を理解する一方的なものではなく、日本人にも韓国に対する理解を求め、お互いが学び合いたいという意識の現れではないかと思われる。また、留学生の日本の生活に関する調査は現職教師ならではのテーマであり、研修生にはもちろん本学の教員にも興味深い内容だった。

プロジェクト（2）の実施について研修生が行った自己評価および感想の一部を紹介する。

- アンケートとインタビューをしながら日本人学生と留学生に会える機会ができる良い経験でした。日本の若者と話せる機会ができて有益だった。

- 日本人の考え方について具体的に考えられる機会になってよかった。アンケート調査のために外国から来た人々と話す機会が作れてよかった。
- 初めてアンケート調査を実施して、分析する過程が作れてよかった。日本の研修じゃないとできない貴重な体験だった。大学を卒業してから初めて経験した授業で、とても興味深く参加して調査を行いました。大学生と留学生とのインタビューは緊張しましたが、面白かったです。アンケートの結果は意外なものが多かったです。
- アンケート調査の過程で最初は話しかけるのが難しかったが、だんだん発話する機会が多くなり、面白かった。
- インタビューを通して恥ずかしさを克服できたし、日本語に自信が持てるようになった。分析を通して予想と違う結果に興味がわいてきたし、発表を通して達成感を味わった。
- 筑波大学の図書館で一生懸命に調査とインタビューをして、高崎中学校でも熱心に調査をしました。
- アンケート調査をするために様々な国から来た外国人と話し合えてよかったです。
- アンケートを行いながら日本人と以前よりもっと話し合えるようになって、体験を通して生きた本当の勉強ができたと思います。

ほとんどの研修生が実際に調査を行った経験がなかったが、日本事情調査プロジェクトに関する研修生の自己評価は非常に高かった。今まで日本事情に関する情報は書物やインターネットを通して得ていたが、実際に調査を行い、情報を収集することによって日本人と話すことが楽しかったという記述が多かった。また、結果の事前予測と実際の結果が違う項目については研修生同士が議論を行い、その理由について考えさせたが、その過程から研修生同士の意見交換の重要性が再認識されたようである。

本プロジェクトは本研修プログラムの中で最も研修生の自主性、実践力が求められ、時間と労力、計画性を要するものであったが、研修生も強い関心を持ち、積極的に取り組んだ。日本語の運用力を高め、研修生の向上心を刺激した点で今後の教育活動に役に立つプロジェクトであったと思う。

3.3 プロジェクト (3) : 日本のお話

日本の伝統話芸の一つである落語について学び、実演を通して日本語の楽しさを体験することを目的に行ったプロジェクトである。落語について講義を聞いて、事前に知識を得た後、柳家さん喬師匠による落語会を開催し、実演を行った。プロジェクト (3) は 2005 年度の日本研修でも実施しており、衣川・酒井 (2007) に詳しく報告されているため、本稿では省略する。

4. おわりに

2006年度の京畿道外国語教育研修院の現職日本語教師海外専門課程の研修についてプロジェクトワークを中心に報告を行ったが、2006年度の日本研修の最大の特徴は研修生が自主的に計画を立てて、能動的に活動を行うようカリキュラムを立てたことである。限られた研修期間内にプロジェクト(2)のような日本事情調査分析ができるかどうか不安もあったが、研修生自身が立てた計画にそって、日本人を対象に直接アンケート調査を行ったり、インタビューを行ったりすることによって日本語に自信が持てるようになったようである。調査の項目、内容、分析方法などには改善の余地が残されているが、研修生が主体となり、能動的に研修が受けられたことに大きな意味があったといえよう。

今後も引き続き、研修生の現職日本語教師という立場においてもっとも必要な研修内容に改善を重ねていきたいと思う。

参考文献

- 衣川隆生・酒井たか子(2007)「現職日本語教師を対象とした日本語再研修におけるゲストセッションについて—筑波大学留学生センターにおける京畿道外国語教育研修院日本研修を事例として—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第22号、91-106
- 国際交流基金ホームページ「日本語教育国別情報」国別一覧<韓国>(2005年版)
http://jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu.2005/korea.html
- 澤邊裕子・金姫謙(2005)「韓国の中高等教育段階における日本語母語話者参加の実際とその意義」『国際交流基金 日本語教育紀要』第1号、115-129
- 朴且煥(2002)「韓国における日本語教師現職者研修の概況」日本語教育学会調査研究委員会、7-13
- 許明子(2006)「現職日本語教師再研修のための教材開発全般について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第21号、137-146
- _____(2007a)「京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修の実施報告—2006年度韓国国内研修の実施について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第22号、47-56
- _____(2007b)「現職日本語教師を対象とした日本語後研修プログラムの実践報告—2005年度筑波大学留学生センターにおける京畿道外国語教育研修院日本研修の実施について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第22号、81-90

注

1. 学校派遣実習の実施に当たっては、つくば市近郊を中心に29校に研修生の実習依頼

状を送付し、引き受けてくれた6校に派遣した。学校派遣実施時間は2007年1月22日～26日の1週間であり、実施校は、茨城県立並木高等学校、茨城県立牛久栄進高等学校、私立茗溪学園中学・高等学校、つくば市立高崎中学校、小美玉市立小川南中学校、小美玉市立小川北中学校である。学校のカリキュラムや授業時間数の確保等様々な学校の事情がある中で、研修生を引き受けてくださり、ご指導くださった学校関係者の皆様にこの場を借りて御礼を申し上げたい。

2. 韓国文化紹介の授業は、京畿道研修院側からの強い要望で実施したものである。韓国文化紹介の目的は次の2点である。派遣実習を行った学校に韓国の文化を紹介することによって両国の文化の相互理解を図る。研修生は日本語で授業を行った経験がないため、日本語に自信を付けるために日本人学生を対象に日本語で授業を行う経験を作ることであった。
3. 研修終了後に研修生に自己評価を行い、研修成果表として最終評価とした。本稿では各プロジェクトに対する研修生自身の自己評価の一部を紹介が、自己評価内容は可能な限り手を加えずにそのまま紹介する。